

「一致、一つ、ただひとり」

エペソ人への手紙 4 : 3 - 6

September.17.2023

エペソ人への手紙 4 : 3 - 6 (パウロ)

Preface

なぜここまで、使徒パウロは口酸っぱく、「一致、一つ、ただひとり」ということを強調しなければならないのでしょうか？

それは、私たちの内に、「一致し、一つになり、ただお一方にあつてピタッと合う」ということを拒みたい根深い悪い性質が、私たちの内にあるからです。

言葉を変えますと、「私が神である」ということです。

「私にこそ、正しい判断があるんだ」と、「私の考え、私の知識、私の経験、私の行い、私の出身、私の背景、私の趣味や趣向、私のアドバイスこそ、物事を裁くに値し、人を裁くことにおいても正義となり得、正しいんだ」という思い込みが、どうしたって私たちを突き動かしてしまうからです。

イエス・キリストを信じるクリスチャンは、曲がりなりにも、天地万物をお造りになった唯一の創造主なる父なる神様を信じ、唯一の救い主イエス・キリストを信じ、またその信じる心を与え下さっている私たちの内に住んでおられる唯一の聖霊なる神様を信じる者でありますから、「私が神である」なんてことを普通は口にすることもなければ、敢えて思ったり、考えたりすることないでしょう。

でもしかし、私たちの日常に現れる現実の姿を見ますと、ありとあらゆるところで、あたかも「私が神である」という言動がそこかしこに見られます。

意識して、そうであるならばちょっと厄介だと思いますが、意識せずとも、すべての言動と言っても過言ではないくらいに、私たちのすべての言動には、あたかも「私が神である」というようなことが表現されてしまいます。

さらに厄介なことには、他者がそう表現した時には敏感に反応することが出来ませんが、自分がそうした時には、ほぼ気付きません。

イエス様がマタイの福音書 7 章で、「あなたがたは、兄弟の目にあるちりはととてもとても良く見えるのに、自分の目の中にある丸太ん棒には全く気付かない」と仰っている通りなのが、他者を押し退けようとする私たちの巧妙に悪質な罪深い姿です。

使徒パウロが書いた手紙が新約聖書の中には 13 ありますが、このエペソ書を含めて、そのすべての手紙の中に、「一致出来ていない、一つでない、ただお一方ではない」という内容が記されています。

つまり、パウロ先生が書いたすべての手紙の書くきっかけや動機の一つが、「一致出来ていない、一つでない、ただお一方ではない」という巧妙に悪

質な罪深い教会の姿、クリスチャンの姿であるということです。

言うなれば、元々、所謂立派なクリスチャンなんていうのは、端から存在しないし、存在し得ないということです。

Part One

なので、私たちはまず、教会を真つ当に理解する必要があります。

エペソ書は、教会を理解し、その教会理解を教会の中で実践し、自らが置かれている社会的状況の中でも実践していくことを目的として書かれました。

教会は、信心深い、敬虔な、素晴らしい、人格に長けた聖人たちの集まりではありません。

霊的に見れば、悪魔の傘下に属し、喜んで空中の権威を持つサタンの指し示す偽りの栄光と偽りの富と偽りの幸いを受け入れ、それを得ることを人生の目標にしながら、罪の中でもがき、うめき、足が折れ、手が折れ、頭に傷を負い、ありとあらゆるところがボロボロな霊的死人であったところから、ただ恵みによって、イエス様のところに一目散に駆け寄って来た者たちがクリスチャンであり、またそんな者たちの集まりが教会です。

誇れるものなんか何一つありません。

生まれながらに備わっている条件の違いや、生まれた後に備わった人生経験の違いや、今身に付けている物品や社会的地位などの肉的なものばかりか、霊的なものに至ってはさらに神の前に誇れるものなんか、何一つございません。

なので、当然ながらそんな私たち人間が、私たちの行いで、天国に行くことは出来ません。

例え、その人生の99.9%が善であったとしても、残りの0.1%の悪ゆえに、天国に行くことは出来ません。

天の御国に入る絶対条件は、100%完全な義です。

じゃあ、誰が天国に行けますか？

99.9%の善なんていう到底有り得ない数値どころか、数少ない私たちの善だと言い張る行為、人様のために行ったと自称する良いと思われる行為でさえも、その人様のためではなく、自分のため。

自分は、他の人とは違うんだということを見せつけ、自らに言い聞かせ、自らに誇り、自らを鼓舞するために行った、自分自身を動機としたものであり、100%純粋に人様を動機としてやったものなんか何一つありません。

「いやいや、そんなことありませんよ」と、もし思われたならば、そう思われたこと自体が、自分自身を動機にした善だと言い張る、実のところ善の皮をかぶった悪なる偽善であるということの証拠になってしまう程に、私たちの中に義や善や正しさはございません。

あの仏陀でさえも、なぜ修業をしたのか？

自分の罪に苛まれ、罪ゆえの人生の空しさに苛まれたからです。

そうして行き着いたところ、人生には何もない“空”という答えにならない答えを装った思いを心に苦虫を噛み潰したように抱いただけなのに、それを後の人たちが偶像化し、モデル化し、あたかもそこに道があるかのように、でっち上げていってしまった・・・

もちろん、すべての人が抱く魂の救済に対する渴望がそうさせたとも言えるでしょうが、結局は、「自分を何ものかにしたい」、「何か立派なものであれるはずだ」、「神にだってなれる」という他者との違いを見せつける、「一致、一つ、ただお一方」という真理から離れた悪質な思いをオカルト的に具現化させたものだと言えるでしょう。

私たちの内に、天国に入れるほどの義や善はございません。

この天の下に、私たち人間に与えられている天国に入れる唯一の救いの道は、イエス・キリスト以外与えられておりません。

使徒パウロの13の手紙の中で、最も多く繰り返し使われている言葉は、ギリシャ語「en Christō」という言葉だそうです。

「in Christ」、「キリストにあって」、「キリストの内に、キリストの中に」という意味の言葉です。

つまり、私たちの力ではどうすることも出来ないことを、イエス・キリストの中に入ることによってのみ、イエス・キリストの内に入れられることによってのみ、天国の道があり、救いがあるということです。

ただ恵みによって、罪なきイエス・キリストの中に入れられたからこそ、それをもって、神は私たちに罪を見出さないと確約なさいました。

キリストの内にあるので、キリストと同じように罪なき者としてみなしてください、99.9%の善でも入ることの出来ない天の御国に、新しい天と新しい地に、100%義なる者だと認めて下さり、入れて下さると言うのです。

それが、クリスチャンであり、教会です。

私たちに誇れるものなんか、何一つございません。

私たちがしたことと言えば、恵みによって、イエスを我が救い主だと告白したことだけです。

その告白さえも、私たちの力や能力によってしたものではなく、神の赦しと恵みによってさせて頂いたものです。

よちよち歩きの赤ちゃんの手をギュッと握って一緒に歩いていったお父さんが、「良く出来ましたね。凄いですね」と言ってあげると、赤ちゃんがあたかも自分の力で歩いたかのようにホクホクした面持ちになっているのと似ているかもしれません。

なのに、そんな事は綺麗さっぱり忘れてか、中々思いつかないのか、クリスチャンたちは、教会は、自分たち自ら、自分たちの中に、他者と比較して立派だと

思えるようなところを探し、見つかったと勘違いし、その立派だと思い込んでいることをもって、「一致、一つ、ただお一方」というイエス様がなして下さり、その完成へと向かっている神のわざに反することをしていると、使徒パウロは仰るわけです。

Part Two

私たちは皆でただ一人の主に従い、ただ一人の主に使えております。
先ほど読みましたエペソ書 4 : 3 に

エペソ人への手紙 4 : 3

御霊による一致を熱心に保ちなさい。(パウロ)

という言葉がありますが、私たちは、一致するために集まった者たちではありません。

一つであるがために集まっており、一つであるがために一致している者たちです。

ここで、皆さんに一つ質問致します。

ものを食べている時でも、話している時でも、私は最近寝ている時にもしてしまい、「痛！」と言って起きてしまうのですが、歯で舌を噛んでしまったり、口の頬の部分をかんでしまった時、噛んだ歯が痛いでしょうか、噛まれた舌や頬が痛いでしょうか？

私が痛いんです！

舌が痛いことは私が痛いことであり、歯が痛いことも私が痛いことです。

これが、一致であり、一つであるということです。

舌が歯に向かって、「なんで俺をかんだんだ」と怒って、寝ている間に舌を口の中でこねくり回して、すべての歯を抜いてしまうなんてことはありません。

逆に歯が、「何てお前は邪魔な奴なんだ」と、歯の平穏を保つために、舌をさらに噛んで傷つけ、取り除けようとする事なんか決してありません。

例えば、親知らずでも、虫歯でも、一つの歯が痛かったら、この大きな体に比較したらほんの小さな部位ですが、その一つの歯の痛みに、全神経、全身体を用いて、その痛みに同調し、良くしようと努めます。

手を使い、目を使い、頭を使い、良い歯医者を探したら、忙しい中でもなんとか時間を作って、手を動かし脚を動かし車を運転して歯医者に向かい、どう痛いのか、肺を使って、口や舌を用いて説明をして、全身をもって、私という 8 9 kg ある一人の人が、1. 5 g 程しかない小さな歯の治療を受けます。

弱いところに、全身、全神経を集中させて、その弱さに合わせ、その痛みをともにすることで、体全体を健全に保とうとします。

体のどんな小さな部位が痛くでも、その部位が痛いのではなく、私が痛いのです。

これが、一致であり、一つであるということです。

私たちは確かに始めから、「痛みなんか無ければいい」と思ってしまいますが、痛みを通して私たちは、遅まきながら「体は一つである」ということを悟ります。

「歯は歯で、舌は舌であるのではなく、歯も私で、舌も私である」という至って当たり前のことを、痛みを通して知っていくのです。

信仰生活において起こる様々な問題は、教会を理解しなければ解決しないということをエペソ書は教えてくれますが、それらの信仰上の問題を、どんなに個人的なレベルで解決しようとしても中々答えを得ることは出来ない。

多くの信仰上の問題は、「教会とは何なのか」ということを理解した時、解けていきます。

問題や痛みが起こらないことが解答ではなく、その問題や痛みを通して、どのような意図があるのかを悟っていくのが教会であり、キリストをすべてのものの上に立つかしらとするキリストのからだなる教会です。

ゆえに私たちは一つです。

皆でともに、ただお一人の主に使え、一つからだとして呼び出された神の民であり、神の子という尊い身分を頂き、皆が同等の神の国の市民です。

なので、罪がある面で分離であり、神さまからの独立であり、神さまが忌み嫌われなさる高慢であるならば、キリストによって新しく生まれた人々には、罪の性質である分離や独立という結果が取り払われ、神さまとの一体があり、神さまとの有機的な深い交わりがあり、分裂と争いではない一致した愛が、当然の実りとして伴います。

比較的どこの教会でも良くあることかもしれませんが、ある教会で、こういうことがありました。

その教会の牧師が、争っている二人の信徒リーダーの方々に、「なぜ争っているのですか？」とお聞きしたところ、「これこれこのようにすることが、神さまに栄光を帰すことになると思うのですが、この人は違うと、あれあれあのようようにすることが神の栄光になると言うじゃないですか！」と答えました。

すると牧師が、「そうですか。あなたも『神様の栄光のためにしよう』と仰り、あなたも『神様の栄光のために』と仰るのに、じゃあ、なぜ争うのですか？

このようにすることが神様の栄光になる、あのようようにすることが神様の栄光になると仰いますが、そのどちらよりもより根本的なことは、お二人が争わないことこそが神様の栄光になります！」

これは言わば、神さまの栄光よりも、神さまの栄光を見据えることの出来ている私自身が、どれだけ立派な人なのかということの方が、遥かに先立っていると

いうことです。

正に、自分でも気付かぬ、他者を押し退け自分の正しさを主張しようとする私たちの内にある巧妙に悪質な罪深さです。

もし兄弟が、愚かなことに我を通し意地を張っていたとしても、むしろそれに屈服して、一つ心となってあげるの方が良いということです。

Part Three

教会は常に、最も合理的な方法で仕事をする場ではありません。

教会はいつも、すべてのことを迅速に行い、無駄がなく、抜け目なく滑らかに物事をやり遂げる場ではありません。

教会はいつも、すべて一つであることを熱心に保ち続けるために、ある時は、知識が無知の前に跪く場です。

賢いことが、愚かなことに譲歩し歩み寄り、持っている者が、持っていない者に仕えていき、自分のことに隣り人を巻き込む代わりに、隣り人のことに自分が巻き込まれていくことを通して、その麗しさを光り輝かせる場として期待されている所です。

だからと言って、「聖人君子でありなさい、立派なクリスチャンでありなさい、倫理道徳的に素晴らしい人になりなさい」ということではありません。

ここ最近、「頭に来てアホとは戦うな！」なんていう本がベストセラーになっておりますが、無理に自分を殺して、無理に怒ることを我慢して、「こんな奴と争ったら、こっちまでアホになる」なんていう思いで避けたり、耐えたりするのは、結局自分を誇ることであり、なれもしないのに聖人君子のように、倫理道徳的に立派な人になることを追求することと同じでしょう。

キリスト者が、無知の前に跪き、愚かなことに歩み寄り、持っていない者に仕え、隣り人のことに巻き込まれていくことは、「こんな奴と争ったら、こっちまでアホになる」なんていうことのためではなく、罪とは何で、罪人とは何なのかということを知っているからこそです。

「罪は憎いけれども、人は罪ゆえに歪んでいるのであって、その人自体をのしりけなす必要はない」ということを知っているからこそこのことです。

罪というものを知っているからこそ、致し方ないことを認め、互いに受け入れ赦し合わずにはいられなくなるのです。

罪を赦すのではなく、罪に浸っている人に自分自身の姿が重なって見えて来ずにはいられず、「主の哀れみと慈しみをともにお与えください」と祈らずにはいられない心が湧いてくるのです。

キリストの心が、七の七十倍赦すという慈しみと哀れみの気持ちを願わずにはいられない心が、聖霊によって与えられ、その与えられた気持ちを拒まずにはいられないことによるのです。

教会はいつでもそうですが、ある面においてはとても優れているのに、ある面においては支離滅裂で滅茶苦茶な人同士の集まっているところです。

そして、そのことをイエス・キリストを信じ知ったがために、互いに認めずにはいられない人たちの集まりです。

なので、慈しみがありませんし、哀れみがありませんし、赦しがありませんし、待つということがありませんし、期待するということがありませんし、裁く前に自らの姿を見つめようとする姿勢が見られますし、自分が出来て人が出来ていないところよりも、その人には出来て自分には出来ていないところに目が行き、心が向き得ますし、自分とその人の違いは、人格的レベルや信仰的水準が違うのではなく、持っている罪が明らかになってしまっているのか、自分で覆い隠し、または神のあわれみによって覆い隠されているのかの違いでしかなく、全く同じような性質の罪を持っている抱えているということにおいて何の違いもないと、「私が優れ、あの人が劣っている」なんてことを胸を張って言うことなんか出来ず、ただイエス様の十字架の前にひれ伏し、イエス様が流された血潮の2, 3滴のみではなく、流されたすべての血潮を必要とし、今も神のあわれみを日々必要としている罪人であることを告白出来るところが、教会です。

そうして、ただ一人の主にあって、一つのからだであることを、一つの信仰によって、熱心に保ち続けようと努めるところが教会です。

一昨日の夕方に、まだ一度もお会いしたことのないある牧師先生から、突然、「『サークルメーカー』という本を日本に紹介してくださり、ありがとうございます」というお電話を頂き、ただただ恐縮するばかりでした。

お話の中で、その牧師先生が心に響くことをお話しして下さいましたが、こういうお話しでした。

「恵」という漢字の意味についてのお話しでした。

恵（パワポ） ←この字を大きくパワポに映してください。

「恵」という漢字は、一日中、十字架を心に抱くという文字だと教えて下さいました。

恵みとは、一日中、十字架を心に抱き生きること、これが恵みだと教えて下さいました。

「この言葉を洪先生に捧げます」と仰って電話をお切りになりました。

しみじみと心に響きました。

このメッセージを準備している時に頂いたお電話だったので、正に、すべて一つであることを熱心に保ち続けるために、時に無知の前に跪き、愚かなことに歩み寄り、持っていない者に仕え、隣り人のことに巻き込まれ行くことは、一日中、十字架を心に抱く恵みによって私たちに与えられるキリストの心だと思わされました。

Part Four

ピリピ人への手紙2：1－5（パウロ）

私たちがいつもはらんでいる危険と言いましょうか、頑固さは、「私が正しいと思うことは、必ずやらなければならない」ということです。

もちろん、正しいことをやることは正しいことですが、その正しいことが正しくあるためには、そのもの自体が正しいのか、正しくないのかを問うと同時に、正しい方法でやらなければなりません。

もし正しい方法でやれたならば、それは正しいことなのでしょう。

でも、正しいと思うことを、正しい方法でやれなかったら、それは正しいことではないのです。

じゃあ、正しい方法とは何なのか？

イエス・キリストがなされた方法です。

譲歩すること、譲ること、無知の前に跪き、愚かなことに歩み寄り、持っていない者に仕え、隣り人のことに巻き込まれていくこと。

これが、イエス様がお取りになった正しい方法です。

では何のために？

同じ思いとなり、同じ愛の心を持ち、思いを一つにして、神の喜びを満たすためにです。

ピリピ人への手紙2：5－8（パウロ）

イエス・キリストは、父なる神が望まれる正しいことをなさるために、全くもって正しくない不正まみれの不条理な死にまで従われるほどに、譲歩し、跪き、歩み寄り、使え、巻き込まれていきました。

それによって、イエス様が為されたことは、正しいことだったというのが明らかになりました。

イエス様は、正しいことを正しくない、つまり、壊してでも我を通すという正しくない方法をお取りになることはありませんでした。

教会は、正しいことを追求するところではありません。

イエス様がなされた正しい方法、即ち、譲る、譲歩する、慰めと愛情と交わりと哀れみの内に、人を自分よりも優れた者と思い、死にまで従い、あとの結果は、神さまにお委ねするところが教会です。

戦うことに、争うことに、競争することに、批判することに、ののしることに、陰口を言うことに慣れ親しんでいる私たちには、聖書の語る教会は、あまり馴染みがなく、慣れないところかもしれません。

だからそこに、信仰的訓練があるわけです。

キリストにあって一つであることを熱心に保ち続けるために、無知の前に跪き、愚かなことに歩み寄り、持っていない者に仕え、隣り人のことに巻き込まれていくという世とは違う神の義を生きるよう特別な天の御国の訓練を受けるところが教会です。

私が武器だと思っていたものが武器ではなく、私が財産だと思っていたものが財産ではなく、私が誇りだとプライドだと思っていたものがプライドや誇りではなく、私が正しいと思っていたものが正しくなく、私が良い方法だと思っていたものが良い方法ではなく、いいやり方だと思っていたものがいいやり方ではないということを経験させられていくのが教会です。

全くもって世の価値観が反映されないのが、教会です。

Conclusion

最後にヨハネの福音書 13 章を見て見ましょう。

ヨハネの福音書 13 : 12 - 17 (パワポ)

神であられるイエス様が、到底そんなことはなさってはいけない対象である罪人の私たちの汚い足を、自ら洗ってくださいました。

私たちが、私たちの兄弟姉妹の足を洗い、受け入れ、間違いや過ちによって、言わば損害を被り、痛みを経験し、耐え忍ぶことは、私たちの責任であり、訓練であり、神さまの要求です。

不幸なことに、長い間キリスト教会は、自分がこの世で栄えるために、信仰をキリストをどう利用しようかということばかりに多くの関心を向け、そして、争ってきてしまいました。

このことが、どれだけ多くの神の訓練の場を妨げて来てしまったか分かりません。

なので今一度、神様が私たちに対して持つておられる膨大なご計画と約束を信頼して、キリスト・イエスのうちにある思いを抱きながら、教会を通して実らせようとしておられる美しい実りを体験させて頂きたいと願っております。

そして、その実りを実らせる私たちでありたいと願います。

お祈りいたします。

祝祷：ピリピ 2 : 5